

生きづらさに臨む演劇の社会学

若者の演劇への参画を事例として

慶應義塾大学大学院社会学研究科博士課程 荻野亮一

1 目的

この報告の目的は、さまざまな「生きづらさ」を前に、演劇への参画がどのような意味を持つのか、明らかにすることにある。そして、この目的の目指す地点をより単純化して述べるならば、生の困難に対して芸術はどのような意味を持ちうるのか、ということである。とはいえ、ここでは議論を限定するため、様々なかたちで取り上げられる「生きづらさ」の内でも、とりわけ若者世代の内に横たわる「生きづらさ」、さらに福祉制度によって規定される障がいや、医学的な見地から決定される疾病、あるいは経済的指標によって指示される貧困といった、制度的な、あるいは可視化されやすい「生きづらさ」ではなく、より個々人の状況に従属し、特有の困難さや躓きと共にあるような「生きづらさ」を議論の対象として考えることにする。また、演劇表現には様々な関わり方が想定されるが、ここでは演劇への参画、スタッフや出演者として制作の主体、つくり手となることに限定して議論を進めたい。つまり、若者世代にとって、可視化されづらい「生きづらさ」について、演劇のつくり手となることがどのような意味を持つのか、このことを明らかにするのが本発表の目的である。

2 方法

そこで、データとして、複数の演劇に関わる高校生、また 20 代の演劇人に対してインタビューを実施するとともに、稽古場での参与観察を行い、質的データを収集し、マイクロエスノグラフィーを作成する。収集されたデータをもとに分析と考察を加えていくものとする。また「被抑圧者の演劇」に代表されるような、いわゆる応用演劇 Applied Theatre の理論も参照しながら、議論を構築していくものとする。

3 結果

要旨作成段階で一部調査実施中の部分もあることから、ここでの結果には修正が加わる可能性が存在するが、現時点で、演劇には（1）経験の協同化（2）経験の反復化（3）経験の身体化という 3 つの側面が関わっており、さらにこれに加えて演劇という表現メディアの有する構造として、（1）現在における過去の現前（2）不在の他者の存在という 2 つの要素を指摘することが可能であり、以上の 3 つの側面と、2 つの要素が「生きづらさ」＝生の困難に対して、困難の経験に対する捉え直しを可能にしていると考えられる。

4 結論

演劇表現に固有の構造と響きあいながら、若者たちは自らの困難を直接／間接に舞台に向けて、記述し、反復することを通じて、生きづらさの捉え直し、生における困難な経験の意味の再編成を行うと考えられる。このことから、演劇が芸術実践としてだけでなく、若者の生をエンパワーメントする社会的活動でもあると位置づけ直し、考えることができるのである。

文献

Nicholson, Helen *Applied Drama: The Gift of Theatre* 2005

アウグスト・ボアール『被抑圧者の演劇』1984